

東日本における弥生時代後期の交流

石川日出志（明治大学文学部教授）

本日の話の内容

本日の私の論題は「東日本における弥生時代後期の交流」です（スライド1）。今回、こちらの新潟市文化財センターで「天王山土器から見た東日本の弥生社会」という展示会が開催されています。その主役は古津八幡山遺跡と、天王山式土器です。今から2,000年近く前ですので、よくわからないことも多いのですが、しかし私たちが想像する以上に、いろんな地域の間で人びとが往来し、かなり遠隔地の人びととも直接・間接に交流し、いろんな物資や情報を手に入れている。その様子をご紹介しますと思います。

この新潟市には、全国的に著名な弥生時代後期の遺跡が2つあります（スライド2）。一つは、国の史跡で整備されました古津八幡山遺跡、もう一つはこのすぐ近くにある、曾和インターチェンジの脇にあります六地山（ろくじやま）遺跡です。新潟市、新潟県にとってはもちろんですが、それだけでなく東日本の弥生時代の文化や活動の様子を語る上で、とても重要な遺跡です。また、終盤にお話ししますが、さらに西日本や東アジア世界までも視野に入れることが必要な、そんな時代であることを気付かせてくれる遺跡でもあります。

さて、考古学から新潟県域の歴史を描く、あるいは考える場合、その地理的環境を視野に入れておくことがとても重要です。私が考古学の道に迷い込みきっかけになった人物に、関雅之という先生がいました。その関先生は、新潟県域は文化の吹き溜まりのような様相を呈していると、昔論文に書いていました。でも私は逆に、文化の吹き溜まりじゃなくて、いろんなものが新潟に入ってくるけど、逆に行ってもいるんだから、むしろ「往来の舞台」と考えた方がよいのではないかと考えるようになりました。新潟県域は、西は富山・石川という北陸方面、北は庄内から秋田方面、それから東の会津・福島方面、さらに南の長野、あるいは群馬。このように、周囲の東西南北いろんな地域と交流を重ねている。それは現在もそうですし、実は過去も、縄文時代であれ、

弥生時代であれ、どの時代もそれが新潟県域の際立った特徴だと思うんですね。

今日取り上げる弥生時代の後期は、西暦でいうと紀元後1世紀から3世紀ごろです。この時代を生きた人々の躍動がよく見えるのが古津八幡山・六地山両遺跡ですし、新潟県内の遺跡です。その辺をご紹介します。

今回の展示の主役となる遺物は天王山式土器という土器型式です。その詳細なお話は、次回（11月15日）、私もお邪魔して拝聴する予定ですが、渡邊朋和さんが、当センターの所長がお話しされます。私はその前座で、私たちが土器をどのように見ているのか、その要点・ツボをご紹介しますと思います。

天王山式土器とは？

さて、天王山式土器とはどんな土器型式なのか、その要点を紹介します（スライド4）。考古学でいう「土器型式」とは、縄文・弥生時代に限らず、いつでもどこでも同じ土器がつくり使われてるということではなく、ある地域のある時期の土器群には特徴のまとまりがあります。それが定まれば、例えばある土器が見つかったとして、その特徴を判別すると、その土器はいつの時代のどこの地域の土器なのか分かります。天王山式土器であれば、弥生時代後期の東北地方の土器で、東北一円から新潟県域にかけて分布するものと分かります。こうした土器を判別する基準、これを土器型式といいます。その名称はその土器型式が認識されるきっかけとなった遺跡名をとります。新潟県内の縄文時代中期の火焔土器ですと、長岡の馬高遺跡の名をとって馬高式と言い、それに続くのが栃尾の栃倉式土器とかと言います。今日の主役である天王山式は、福島県白河市にある天王山遺跡が発掘調査されて初めて一つの土器型式と認定されたものです。

この天王山遺跡は、福島県の中通りの一番南の端で、ひと山越えれば、栃木県・関東という地にある遺跡です。この遺跡が、昭和25年（1950年）に地元の藤田定市さんという方が中心となって発掘調査されて、東北地方の弥生時代遺跡では、本格的な発掘

調査としては最初のもので、大量の土器が出てきました。それが東北地方の弥生時代の一時期を特徴づけることから、天王山式土器という名称が同年に提唱されました。

土器の説明はなかなか難しく感じられると思いますので、少しずつ馴れていきましょう。まず第1ラウンドから入りましょう。天王山式土器の代表例の図面と写真をスライドに示しました。

最初に土器の形を見てみましょう。縄文土器は、東北地方の縄文時代後・晩期には小形の壺も出てきますが、煮炊き用の深鉢（鍋のこと）が圧倒的多数を占めます。一方、弥生土器では、頸がすぼまった壺形の土器が、全体の半数まではいきませんがかなりの割合を占めます。これが弥生土器の際立った特徴です。天王山遺跡の土器には壺がたくさんありましたので弥生時代の土器だということはすぐにわかったんです。

ところが、文様を見るとまるで縄文土器みたいで、とても不思議なんですね（スライド5）。例えば口の部分。普通弥生土器ですと、口が平らなものが圧倒的多数なんですが、天王山遺跡では口の部分に出っ張り、小さな山形の突起がついている。それから、この頸の下の部分に横線が引いてあって、ところどころ縦に区切ってる。工字文といって、工場の「工」の字の形をした文様がある。この文様図形は、縄文時代の最後の縄文時代晩期の、さらにその一番終わりの段階に、特徴的にみられる文様なんですね。突起がある、工字文がある、まるで縄文土器みたいだというので、初めは、弥生時代でも早い段階だろうと考えられました。ところが、現在では、弥生時代を前期・中期・後期三つに分けますが、そのうちの後期の段階だと考えられています。

弥生時代でも古い方だ、いや新しい方だと、いろいろ議論があったんですが、今日会場に会津若松市から中村五郎先生がお見えですけれども、中村五郎さんはじめ何人かの方々が、弥生時代の中でも新しい段階であることを論証されました。福島県や茨城県あたりの土器群を相互に比較して順番に並べる（これを編年といいます）と、古いところには置きようがない。古そうな突起や工字文はあるんだけど、実は新しいのだということを知りかされました。現在ではだれも異論を唱えない定説となっています。私たちは中村さんをはじめとする、先輩の方々のお考えや議論の土台の上にこの土器を見ているわけです。

そうは言いますが、石川県や富山県でも天王山式土器が見つかるんですが、これは弥生時代でも中期とみる意見がずっと根強く残りました。北陸ではむしろ主流をなす意見だったほどです。

この天王山式土器は、非常に有名な土器型式なんですが、その位置付けについてはずいぶん違う意見がありましたので、わたしは「考古学者を惑わす土器型式」と呼んできました。そう呼ぶということは、俺はわかったんだというつもりがあるわけですが、先ほど私を紹介された今回の展示企画者である渡邊朋和さんから最近、「石川さん、あなたが書いた論文は、あなたより若い私たちを惑わしてる」と批判されています（笑）。どこが渡邊さんと考えが違うかは、次回の渡邊さんの講演で紹介があるでしょう。現在彼とは、天王山式土器をめぐるバトル中です。ですから、今回と来月の講演会も、2人のバトルのつもりでお聞きいただくと面白いと思います。

弥生時代後期の新潟県域

さて、新潟の弥生時代後期はどんな様子なのかに進みましょう。現在までわかっている遺跡の位置を、地図に点で落としてみました（スライド6）。左右同じで、左側の図は小さいので、右側にちょっと大きくしました。弥生時代というのは、基本的に水田稲作が生業（なりわい）の基本ですから、平野部にムラを構えるので、山間部には遺跡は少ない傾向ははっきりとわかります。いくつかのマークが落ちてあります。本日の主役である天王山式土器が見つかった遺跡は四角で示しています。新潟平野およびその周辺一帯、県北から南は長岡周辺まであります。北陸に由来する土器が見つかった遺跡は白丸で示しました。上越から柏崎、そして新潟市周辺の南部、佐渡。下越の方には少ない。つまり、北陸系の土器型式と東北系の天王山式土器が、新潟平野の中央部で重なっています。縦長の楕円形は長野県北部に由来する箱清水式という土器型式で、信濃川沿いに下流側に分布が延びて、弥彦・角田山塊まで見られます。さらに弥生時代後期後半から終わりごろになると、遠く北海道に由来する続縄文土器も南下してきます。逆三角形の印がそれで、村上界隈から海岸沿いに点々と見つかると、新潟市の六地山遺跡より南になるとまばらになり、柏崎・柿崎・高田の遺跡で土器片が1点ずつ見つかっています。一つの遺跡で多数の土器が出土することはありません。

つまり、新潟県の弥生後期というのは、4つのまったく由来・系統が異なる土器型式が折り重なって

ます。私が考古学の道に進むきっかけとなり、また大きな影響を受けた関雅之という考古学者がおりましたが、関先生は、昭和46（1971）年の論文で、弥生時代の新潟県域は、文化の吹き溜まりのように、東西南北いろんな地域の土器が折り重なっている。ひとつの弥生文化が順調に展開していく、そんな単純なものではないと指摘しました。とても重要な指摘で、そんな地域は日本列島の中ではなかなかないですね。この複雑さが新潟の弥生文化の特色だと言っているわけですね。

新潟の弥生文化探求の歩み

では、そうした新潟県域の弥生後期の様子がどのような遺跡の調査によって知られるようになったかを、次に見てみましょう（スライド7）。結論を申し上げますと、昭和62（1987）年から始まる古津八幡山遺跡の調査によって、それまでの理解がかなり大きく変化したのだということを示すだけでも感じていただければと思って、紹介するものです。

現在、弥生時代後期と扱っている遺跡が、新潟県域にもあるということは、戦前はほとんど意識されませんでした。昭和10年代によく、弥生時代は前期・中期・後期3つに分けて考えようという意見が出てきたので、それ以前に発見されたものは弥生時代だとはわかって、その中のいつごろかはわかりませんでした。現在から見て、弥生時代後期の資料と思われる土器が最初に見つかったのは、佐渡でも大佐度が一番北端にせこの浜洞窟という遺跡があります。昭和初年に小規模な発掘が行われまして、右下の写真のような土器が出てきました。その中に縄文が施され、斜め線の文様のある土器があります。今から見れば天王山式土器です。あとで説明しますが交互刺突文という天王山式特有の文様が確認できます。その一方で、文様のない、口の部分が屈曲する、現在の眼で見れば北陸系の土器もあります。ここですでに2系統の土器が一緒に見つかっています。これが新潟に弥生土器ありという考えの本格的なスタートだと思います。しかし、いかんせん、全国的に弥生時代・弥生文化というものの実体がまだよくわかっていませんでした。

弥生時代の遺跡・文化に注目が集まるようになるのは、戦後になってからです。全国的にもそうなんですね。その一番のきっかけは、戦後の昭和22年から25年まで、静岡市の登呂遺跡が発掘調査されたことでした。弥生時代の住居12軒と倉庫2棟からなるムラが発見され、その居住域の南側の低い土地に水

田が整然と造成されていました。住居1軒に例えば5人が住んでいるとすれば60人、それぐらいの人たちが、数ヘクタールの水田を造成し経営している様子が鮮やかに確認されたんです。新聞などを通じて全国的に大きな話題になりました。戦後間もない、非常に混乱した社会状況でしたが、土の中を発掘すると、弥生時代、約2,000年前の人々の生活の様子鮮やかにわかることにたいへんな注目が集まりました。

その調査に、全国から見学に行った人たちがたくさんいましたが、その中に佐渡中学校の先生である本間嘉晴さんという方がおりました。その後ずっと新潟県の考古学界の指導的な役割を担われた方ですが、登呂を見て、佐渡にもそんな遺跡があるに違いない、そういう思いを強くされたようです。間もなく、登呂遺跡の調査が終わった2年後、昭和27年に佐渡の国仲平野の西南部で、国府川という河川改修の工事中に、弥生土器と木の板等が大量に見つかりました。これは大変だ、登呂遺跡とそっくりな遺跡が佐渡にもあるということで、発掘調査することになりました。出身校である國學院大學の大場磐雄という考古学の先生に応援を頼みまして、すぐに國學院大學の研究スタッフが来まして、佐渡の方々と一緒にこの遺跡を発掘調査しました。

スライド8の右側にあるように、板材を矢板状に打ち込んでる状況などは登呂とそっくりなんですね。いろんな木材が出るわけですが、その中に脱穀用の杵があったり、魚を捕獲したりするのに用いるたも網もありました。それと一緒に文様のない土器がたくさん出てくる。弥生土器でも新しそうだ。弥生時代の木製の遺物が、たくさん弥生土器と一緒に見つかって、登呂遺跡と同じような状況が佐渡にもあることがわかりました。全国的にも注目された調査でした。これほど内容豊富な遺跡はその後なかなか見つかっていません。

それから昭和31年に、ここにほど近い曾和インターの付近ですが、六地山遺跡の発掘調査が長岡市立科学博物館主体で行われました（スライド9）。当時の写真を見ると、今と違ってけっこう畑の起伏がありますね。後ろに角田山・弥彦山が見えます。この畑の高まりの上に弥生時代の人々が残した土器や石器が大量に見つかりました。これ六地山遺跡です。この土器は、弥生時代でも新しい段階、後期段階だということはわかったんですが、これをどう理解するかずっと議論がありました。私は弥生時代後期で

も後半だと扱ってきたのですが、最近、渡邊朋和さんは「石川さん、そこは大間違い。これ弥生時代後期でも早い段階だから、考え方を改めた方がいい」と、教育的指導をされています。言われてみればそうだなと、今頭を悩ましながら考えを改め中です。負けそうですね。ちょっと癪なんですけど、そう考えた方がよさそうですね。それはさておき、土器は出てきたんですが、石器も少しばかりありましたが、住居跡だとかは見つからず、ムラや生活の様子とかが、なかなかわかりません。

ちょうど同じころですね。昭和30年から33年までの4カ年、東京大学の考古学研究室が、上越の山寄り、妙高山のふもとの丘陵の上にある斐太遺跡群の発掘調査を行います。丘陵上の地表にたくさんの窪みがあって、発掘してみると堅穴住居でした。発掘調査されて、何軒かの四角い堅穴住居跡が見つかりました（スライド10）。ところが、そこから出てくる土器は、ほとんど文様がないもので、形から言ってもなかなか位置づけようがないものでした。現在から見れば、北陸に由来する土器を主とし、それに長野から東海方面とつながりのある土器群なんですけど、当時はなかなかわかりませんでした。

それからまた16年ほどたって、昭和46（1971）年に、私が高校2年生のときですが、村上市の三面川の河口、すぐ北側の高い段丘上にある滝ノ前遺跡が発掘されました（スライド11）。目の前は日本海で、目の前に粟島、遠くに佐渡や、天気がよければ角田・弥彦山塊も見える、非常に眺望の開けた高台にある遺跡です。発掘で、平面形が円形の堅穴住居が3軒見つかりました。そこから鮮やかな文様が描かれた土器が出てきました。今回の展示の主役である天王山式土器です。福島県の天王山遺跡を標準とする土器型式の集落遺跡があることがわかりました。

天王山式土器というのは、先ほど触れましたように戦前、せこの浜洞窟でも見つかっていました。上越を除く県内各地で点々と見つかってはいたんですが、まとまって見つかるのは、このちょっと前に発掘された村上市の砂山遺跡とこの滝ノ前遺跡、二遺跡しかないんです。

ちょっと個人的な話をしますが、今日も展示されているスライド11の右上の土器は、私の人生に大きな影響を与えた土器なんです。私が高校2年だった10月21日。日曜日かと思っていたんですが、調べたら高校の創立記念日で木曜日でした。同級生の、現在帝京大学の考古学の教授をしている阿部朝衛さん

（当時は「さん」なんてつけません！）に「関先生が村上で発掘しているから参加させてもらおう。お前も来い！」って誘うんです。私は水原町と安田町の境に住んでいましたから、せっかくの休みの日に、わざわざ汽車に乗って県北の村上まで行って発掘するのは気が進まなかったのを思っています。「気が向いたら行くから」とか言っていたんですが、なぜかその日村上に行っていました。そしたら、目の前に弥生時代の住居跡が出てくる。もうびっくりしました。1日だけの参加でしたが、住居跡は鮮烈でした。何日かしたら、関先生が土器を学校に持ち帰って、僕ら高校地歴部の部員に洗わせました。掃除のバケツでお湯をわかして、毎日放課後、土器洗いをしました。させられたのか、したのかはわかりません。でも面白かったですね。この3個の土器、土にまみれたこれらの土器を私がたまたま洗ったんです。馬毛ブラシでこすると、二本線の間を交互に突き刺してつけた文様が現れるんです。関先生に「これは何ですか」って聞いたんです。そしたら関先生いわく、「高校生にもなったら自分で調べなさい。図書館に行くと、河出書房の『日本考古学講座』というのがあるって、その弥生時代の巻の東北地方を見なさい。」と、ただそれだけなんです。「あれ、教えてくれないんだ」とは思いましたが、私もまじめな高校生でしたので、言われたとおりにその本を見ました。そしたらこの図が載っていたんです。あ、私が洗った土器と同じ文様の土器だ。口の部分が山形になっていて、交互に突き刺した文様がある、そっくりな土器でした。そうか、これは天王山式土器っていうんだ。考古学って面白いっていうんで・・・それから49年後の今、ここで天王山式の話をしているわけです。

脱線はまだ続きます。考古学者である関先生は、高校生は発掘に連れていかないと宣言していたんです。高校生を発掘に連れていくと、人生を誤るから連れていかない、と言うんです。ところが、あとから調べると、この遺跡は緊急事態でやった発掘で、発掘の人手が足りなかったようなんです。高校生の手も借りたかったらしい。そのいいタイミングで阿部さんが「発掘に参加したい」と申し出たので、OKが出た。この一日の発掘で少なくとも3人がこの道に進んでしまいましたので、関先生の危惧「高校生を発掘に連れていくと人生を誤る」というのは的確な予想ということになります。ま、よかったかなって思いますけど（笑）。本題に戻ります。

古津八幡山遺跡の発掘調査

スライドがようやく古津八幡山遺跡まできました(スライド12)。この遺跡の発掘調査が始まったのは、昭和62年でした。磐越自動車道の建設に必要な土砂をどう確保するかが検討されて、古津八幡山一帯が土砂採取の対象地になりました。そして今日もおみえですが、坂井秀弥さんをはじめ、新潟県教育委員会のスタッフが現地に入って、地表調査や試掘調査をして、丘陵の上なのに弥生土器の破片が見つかるのはなぜだろうと、不思議に思ったそうです。弥生時代は稲作農耕民ですから、水田経営にふさわしい低地にムラを構えるのが普通なんです。なぜか山の上から弥生土器が見つかる。これを、ただものではないと判断する嗅覚ってすごいですね。ほんとに小さなかけらなんです。それを見逃していたら、古津八幡山遺跡は、いまは空中になっていたでしょう。そこから何次にもわたって本格的な調査が重ねられ、そして丘陵の上に南北400mぐらい、総面積10数haもの大規模な弥生時代後期のムラが広がっていることがわかりました(スライド13)。丘陵のてっぺんだけでなく、北側や南側に延びる尾根筋にも、最近の調査では、さらに北東に延びる低い尾根にも建物が建てられていたことが分かっています。ムラの中心部分は、途切れとぎれですが、何重かの濠で囲われている。

この遺跡からみつかる土器は、弥生時代後期の初めから後半段階まで連続していますから200数十年も存続したことが分かります。天王山式土器に由来する弥生時代後期の東北系の土器と、それから北陸系の土器とが共存していて、なおかつ両者の要素を合わせ持つ、こういう土器もあるのがこの遺跡の特徴だということもわかりました(スライド14)。

スライド15・16はムラの中心部、居住域の周りをめぐる濠です。断面V字形で、右上は発掘調査している最中ですので、作業員さんたちが濠の中に入って発掘していますので、濠の深さや大きさがわかるかと思いますが、本来の濠の幅や深さはもう少し広く深かったと考えられます。丘陵上の傾斜地ですから、濠を掘った土を盛って外側に築いた土塁も、濠自体の上部も雨水によって浸食されて削られています。本来はもう少し深いものです。この遺跡の中央部の北寄りに、大きな円形の古墳が築かれています。この弥生時代後期のムラが廃絶されてから約100年後に築かれたものです。調査時のこのスライドではうっそうとした杉林になっていますが、今はもう全

部伐採されて、ムラの姿や古墳が整備されています。

それから、ムラだけではなくてお墓も一画から見つかっています(スライド17)。溝で四角く囲った真ん中に墓穴を設け、板をそこに持ち込んで、棺を組みます。その棺の中に遺骸を埋葬するんですが、死者に鉄の剣と石の矢じりを副葬しています。墓のことや、副葬品のことは、またのちほど触れます。

こうした長年の発掘調査成果に基づいて、平成17(2005)年に国の史跡に指定されました(スライド18)。指定理由は、要約しますと次の通りです。日本海側では一番北端に位置する、弥生時代後期の大規模な高地性の環濠集落である。そしてこのムラのあとに大規模な円墳が築かれた。さらに古代には製鉄の活動も盛んに行われた。弥生、古墳、古代の複合遺跡であるということがわかった。その中で、国史跡にする一番重要な理由は、弥生時代後期の大規模な高地性集落である。新潟県の当時の社会状況や、周辺地域との交流の様子を知ることができる。特に高地性集落は、北陸一帯に点々と分布するが、現在のところここが最北端に位置する。北陸から新潟までの弥生時代から古墳時代にかけての様子を知る上で、非常に重要だということから、国の史跡に指定し、保護を図ろうとするものであるという指定理由です。ここに北陸の高地性集落の最北端とありますが、その後、村上市で山元遺跡という高地性集落が見つかり、古津八幡山遺跡に比べるとかなり小規模ではありますが、最北端に位置する高地性集落という重要性から国の史跡に指定されています。

弥生時代「越後」の躍動

これから弥生時代後期の越後の躍動の様子を見ていきましょう。「越後・佐渡」としたかったんですが、弥生時代後期の佐渡の様子がまだよくわからない点がありますので「越後」としました。弥生後期の越後、新潟は、先ほど来何回も触れましたように、東西南北の周辺諸地域と、場合によってはかなり遠隔地と密接な交流を重ねた状況がわかっています。スライド19では、右側に矢印で示しましたが、西からの矢印は北陸からの人々・情報・モノの往来、その下の矢印は長野方面から千曲川、新潟県の中に入ると信濃川ルートで、人々・モノ・情報が入る。右側からの矢印は会津方面から人・モノ・情報が入る。それから、弥生時代後期の後半になりますと、上からの矢印が北海道方面と関わりのある北方の人々の往来がみられる。この4者が折り重なるように、新潟でさまざまな活動を繰り広げたことがわ

かってきています。これは何も弥生時代後期に突如始まったことでなくて、その前段階である弥生時代中期後半、紀元前1世紀代にも非常によく似た状況があります。前段階からその準備状況が始まっていることがわかってます。

ちょっと煩雑な図ではありますが、スライド20の真ん中に弥生後期と同じように、4つの矢印があります。北陸方面から橿原土器といわれる土器を持った人たちの動きが明瞭で、下越まで進出しています。長野方面からは信濃川沿いに十日町界限に入り、さらに新潟平野へも入りますが、発見される土器は少数になります。さらに一部は佐渡、それから村上界限にまで長野に由来する土器などがみつかります。それから福島方面からは、会津盆地からかなり濃密に土器がやってきてます。それから北の庄内、秋田方面からもかなり明瞭です。この4つの地域に由来する人・モノ・情報が折り重なっている。これが弥生時代後期にも引き継がれたわけです。この東西南北4つの隣接地域に由来する文化が折り重なっていると言いましたけれども、ばらばらにあるのではなくて、例えば新発田市(旧加治川村)の山草荷遺跡では(スライド21)、北陸、庄内・秋田、会津、長野の4つの地域に由来する土器が共存しています。土器の特徴をそのまま人に置き換えていいかということについてはいろいろ議論があるところですが、4地域の人がこの山草荷という弥生時代のムラで共同生活をし、北陸、長野、会津、庄内・秋田方面の人々と物資のやり取りや情報交換をしていると考えていいと思います。これが弥生時代の後期に引き継がれる(スライド22)。

いろんな周辺地域に由来する人・モノ・情報の動きを、どうやって読み解くかということ、遺跡からもっとも多く出てくるのが土器ですから、その土器を細かく探究するということから、当時の人やモノ、情報の動きを復元していくのが順当で、確実です。

天王山式土器をどう読むか

スライド23は古津八幡山遺跡で発見された天王山式土器です。弥生時代後期前半ですから、古津八幡山の丘陵上に大きなムラができる段階の土器です。これをどう読むか見ていきましょう。

土器は立体物です。ぐるっと360度土器の面が広がっていますから、土器の形も、装飾の加え方も、自由奔放であってもおかしくありません。どんな形でも、そしてどこにでも自由に文様を描いてよさそうなのに、形も装飾も、そこにはちゃんと土器型式

としての約束事があるんですね。まず天王山式土器の形をみると、すぼまった頸の部分はおおむね筒形をしています。そして頸の上下で屈曲して口(口縁部という)と胴(胴部という)へとつながります。そうした形の土器に装飾を加えるには、この屈曲部に横線を引くことによって、土器の面をいくつかの横帯に分割します。分割線で文様の帯を設けるわけです。天王山式では分割線の部分に交互刺突文というのを好んで入れます。そして文様の帯に弧線を組み合わせて文様図形を描きます。これが天王山式土器の特徴なんですが、古津八幡山遺跡でもそのことをよく確認できます。このことから、この遺跡が弥生時代後期前半、紀元後1世紀に始まるということがわかります。この前段階の中期後半にはまだ人々が住みついていません。天王山式土器ですから、その主役は会津・福島方面との往来が盛んな人々ということになります。

もう少し、土器を読むレベルを上げましょう。私たち考古学者が土器をどんなふうに見てるのか。天王山式土器のどういうところに注目して見ているのかを知っていただきたくて、絵をつくってきました(スライド24)。

まず土器を見るときに、当然のことながら、まず形を見ます。スライド24の写真を見てください。僕らはこれを甕と呼んでいますけれども、頸がちょっとすぼまって口が開く。それから胴が膨らむ。この土器の形には、口と頸と胴がある。ところが、土器の形どおりに文様が描かれてるかということ、微妙に違うんですね。そこで、土器の形の次に、文様の帯がどこにあるかを見ます(スライド25)。その文様の帯の分割線がどこにあるかを見ます。縄文土器以来の伝統で東日本では弥生土器もそうで、横方向の装飾の帯を設けて、その中にいろんな図形を入れます。この天王山式の場合は、口の部分は突起はありますが一応水平で、口と頸の間に分割線が入ります。それから頸の途中と、胴部の真ん中にも区分の線が入ってます(横三角印)。その帯の中に文様図形を入れます。この土器では、頸の帯には文様を入れません。文様がないので無文といいます。無文の帯を設けます。

次のスライド26で、ほかの土器では文様の帯がどのようなになっているかをみると、右側5点のうち、上3点は左の土器と同じように、頸に無文の帯を入れています。ところが、下の2点は、頸の部分に無文の帯がない。こういう土器もある。ですから、土

器を装飾する帯をどう配置するかという約束事には二通りある。文様の帯をこのように見るわけです。

ですから、僕は土器を見て、口縁部、頸部、胴部なんていいいますが、実は形だけを見てるわけではなくて、実は文様の帯も一緒に見ている。場合によると形よりも文様の帯に重点を置いて見えています。文様に引きずられた見方といってもよいかもしれません。

次に、その文様の帯の分割線はどのように描いているかを見ます(スライド27)。このスライドの土器では、分割線部分に竹串の持ち手側ほどの太さの棒で描いた窪み線(沈線という)を横に2本引き、その間を突き刺すと波形の出っ張り線ができます。これを交互刺突文(こうごしとつもん)と音読みします。これが非常に特徴的なんですね。もちろん交互刺突文のない沈線だけの例もあります。どこに文様の帯の分割線があるか、そこにどんな文様を加えて分割線にしているのか。そんなところを見ます。

次に、文様の帯の中にどんな図形を描くかを見ます(スライド28)。このスライドに示した5個体の土器の胴部文様の帯をみると、かなり複雑な文様図形を描いているように見えます。ところがよく見ると、上に開く弧線と、下に開く弧線とを上下に組み合わせる点ではみな共通しています。上下の弧線を、上下対称に置くか、弧線一つを一単位とすると半単位ずらして置くのとでずいぶん違った図形に見えます。しかし、基本形は弧線の組み合わせなのです。このように一見複雑そうに見える文様図形であっても、いくつかの例を比較することで、共通する約束事があることを見出すことができます。

もちろんこうした点だけではなくて、縄文がよく施されていますが、縄文を施す際に用いた縄(縄文原体という)の撚りが右撚りか左撚りか、撚り合せの回数は何回か、土器面に縄を転がして施文しますが、横回転か斜め回転か、ただ転がしているか、それとも斜めに引きずりながら転がしているか。沈線なら、太く深く線を描いているか、それとも浅く引いているか。それから1本で描いているか、2本で描いているか、とかを確認します。図形もいろいろです。弧線をよく使うと言いましたが、端っこをくるっと巻くか否かとか、線が滑らかか、ふらつくかとか、そうした細かな癖、特徴を詳細に観察して、遺構ごと、遺跡ごとに比較して、共通する／違うを見極めた上で、古いとか新しいとか、これは新潟に多いとか、これは福島に多いとか、これは北方の要素だ、

いやこれは……とか、そういう判断を、ねちっこくやっています。そうしないと、こういう土器を残した人たちの姿が見えてこないからです。

天王山式土器を出す新潟と北陸の遺跡

さて、古津八幡山遺跡が営まれ始めたのは弥生時代後期前半の天王山式土器の段階です。同じように天王山式土器を出す遺跡が新潟県内でどのように分布するのかをスライド29に図示しました。角田山と佐渡の間の海中にあるのはミスですし、渡辺さんに教えてもらった、上越でも子安遺跡で破片が見つかるそうです。もう少し入念に点を落とす必要がありますので、これは参考程度に見てください。

分布図を見ると、新潟県内では新潟平野に圧倒的に多いですね。南魚沼郡域、六日町盆地と言った方がいいでしょうか、遺跡数は少ないんですが、旧塩沢町の来清東遺跡とか意外にも天王山式土器がまともに出てきています。新潟平野とは別に、只見川ルートで直接会津方面とつながっているのだと思います。新潟平野に多いと言っても、一つの遺跡でまとまって出てくる遺跡は新潟市の古津八幡山遺跡、村上市の滝ノ前遺跡と砂山遺跡、旧豊栄市の松影A遺跡とかで、そんなに多くありません。阿賀北は、新潟砂丘の内側をはじめけっこう遺跡の密度が高いようです。

ところが、天王山式土器を出す遺跡は新潟県内だけでなく、もっと西側の地域でたくさんあることがこの地図でよくわかります。富山県と石川県がものすごく多い。富山平野から口能登(能登南部)に特に多い。もちろん、石川・富山両県の弥生時代の土器は、基本的に縄文を施したり沈線で盛んに文様を描いたりはしませんから、そういう土器が出てくると「おやっ？」と注目した結果、報告される率が高い。一方、新潟では、縄目や沈線文様のある弥生土器は普通ですから、調査して報告する側が注目しない公算が高くなるということも考えなければいけないでしょう。それでも、この富山・石川両県で天王山式土器が発見された遺跡地点数の多さは大いに注目すべきでしょう。

これは正真正銘の天王山式土器だという資料の西端は、石川県最南端の加賀市橋立大野山遺跡です。加賀と越前の境界の、丘陵性の台地が日本海にちょっと突き出たような地形の地点です。小さな破片ですが、土器の色調や文様の特徴から、私は下越の土器ではないかと思っています。福井平野にも1か所点を落としてあります。鯖江市持明寺遺跡です

が、これは新潟から持ち込まれたものではなく、富山・石川両県あたりから持ち込まれた可能性があると思います。

このように東北の土器型式であるはずの天王山式土器が北陸にも発見例があることは、1957年にすでに注目されていました。先ほど触れた橋立大野山の土器片です。石川県内では見たことがない土器なので、東京圏の誰かに問い合わせたわかったんでしょうね。片山津の医師で、考古学をライフワークにもしていた中口裕さんという方が『柴山潟』・『県下の貝塚と古墳』という本の中で、はっきりと東北の天王山式だと書いています。次に注目されたのは私が大学1年の時でした。富山県の考古学会が出している雑誌『大境』第5号に、高岡市の海岸にほど近い場所にある頭川（ずかわ）遺跡で天王山式土器がまとまって採集されたという資料紹介が載りました。これは驚きましたね。正式な発掘調査ではなく採集された資料です。頭川、頭の川と書いて頭川っていいんですが、1974年に富山県の考古学会の会誌に報告されたとき、僕大学の1年でしたが、すぐ買ってきて、見てひっくり返りましたね。新潟でも天王山式土器は当時、滝ノ前遺跡とか、わずかしかなかったのですが、図面を見るとまるで下越の土器みたいなのがまとまって出てきました。しかも同時代の地元・北陸の土器がほとんどないんです。当時私は弥生よりも縄文や旧石器に関心を持っていましたが、これには驚いた記憶があります。

それから20年余りたってから、現在は同じ高岡市になりますが、少し内陸側に入った地点にある下老子笹川という遺跡です。ここは大規模な発掘調査がされて、弥生時代後期の集落が検出されました。この遺跡の一角でややまとまって天王山式土器が発見されました。スライド30の右上の土器は、頸の部分に菱形を何重にも重ねた文様があるんですね。この土器の拓本を採って、とある著名な某大学のK先生にお見せしたら「えっ、これは北海道の恵山式土器じゃないか、石川君！」って叫びました。それほど北海道の続縄文土器にそっくりなんです。この頸の部分だけ見たら、誰もが続縄文土器というでしょう。口縁部の形や文様からみて天王山式土器としてよいのですが、北海道との関係を考えないわけにいかないでしょう。

ではこの下老子笹川遺跡で、天王山式土器がどんな出方をするかという、報告された土器の出土地点を点検してみますと、2か所だということが分か

ります(スライド31)。直径200~300mほどの範囲に北陸の地元の土器を伴うムラが広がってしまっていて、その中と隣接地の2か所から見つかりました。土器は多数が出土するのではなく、ぱらぱらとこの範囲にまとまるのです。これをどのように考えればいいのでしょうか。私はもっとも簡単な考え方をしています。下越から舟に乗ってやってきた人びとが、富山の高岡界限の人々がムラを構えるところに出かけて行って、そこでさまざまなモノや情報の交換をしているのではないかと。そしてまた戻ってくると。富山の薬売りの逆を考えたらどうでしょうか。地元のムラが近くにはない頭川遺跡(スライド30)のような地点は、下越の人々の上陸地点にほど近いところでキャンプをしたのではないかと。下越の人びとが往来していろんな交渉や交易をしているのだらうと推測しています。その足跡、滞在地に天王山式土器が残されたのだと思います。

スライド32は、私が昔、1988年にとった拓本、図面ですが、先ほど紹介した加賀市の橋立大野山遺跡の土器片です。土器自体が下越方面から持ち込まれた最も西の例です。

その下の石鏃は大坂府高槻市にある芝生遺跡の発掘で見つかったアメリカ式石鏃です。「アメリカ式」なんておかしな名前ですが、明治年間の1880年代に石川県の河北潟脇の大根布というところでこれと同じ形の石鏃が見つかった際に、アメリカ原住民が使う矢じりとよく似ていたのでこの名がつけられたのですが、もちろんアメリカとは何の関係もありません。東北から新潟にかけて天王山式土器に伴って発見されます。『新版古代の日本』という角川書店の本の中に鮮明な写真が収録されていますが、お手元のプリントには、私が作成した輪郭だけのスケッチを原寸で載せました。私は1994年に実物を見せてもらったのですが、驚きました。この石鏃をつくるのに用いた石材が下越の石なんです。とても特徴的なので、すぐ下越の珪質頁岩とわかります。しかも、両面の付け根の部分にアスファルトがごくわずかですが付着しています。石材が下越なので、アスファルトが付いてる。もうこれは下越から行ってるとしか考えられません。ですから、下越から直接ここまで行ったか、それともリレー式でだったのかは決めかねますが、天王山式土器に伴うこの矢じりが、下越から大阪までもたらされたのです。ずいぶん遠くまで行ったものです。

では、下越の人びとは何を手に入れるためにこん

な遠方まで出かけたのでしょうか。いくつも可能性があるとありますが、私は1つ有力候補が鉄の道具だと考えています(スライド33)。この天王山式の弥生時代後期前半期というのは、西日本から中部地方、関東一帯で一斉に石の道具が姿を消します。ものを切ったりする利器が、石器から鉄器に劇的に移り変わる時期にあたります。鉄器とその素材は、すべて朝鮮半島の東南部に由来するものなんです。それを入手するために、下越の天王山式土器を使う人々は北陸に行った。北陸まで行けば、山陰、北近畿辺りの人が往来していますので、そこで鉄の道具を手に入れることができたのだと思います。

実際に、東北一円、新潟でもそうですが、この天王山式土器の時期になりますと、アメリカ式石鏃など矢じりは消耗度が非常に高いので、そういうものには鉄は使わないので、石の矢じりは残りますが、木を伐採する石斧は急速に数を減じています。石斧の発見数の減少から東北地方でも鉄斧が普及する様子を知ることができます。それ以外にもいろいろなものを入手するために、この下越の人々が躍動しているのだらうと思います。

高地性集落

ちょうどその時期に、丘陵の上にムラを構える古津八幡山遺跡が出現し(スライド34)、弥生時代の終わりまで、200年余りにわたってムラが継続します。丘陵の上に住まいを集め、その周囲に幅や深さが2mほどある濠をめぐらします。高地性集落と言います。先ほども触れたように、ここに住まう人々は水田稲作農耕民ですから、こんな丘陵の上に住むのでは水田経営をするにはとても不便なはずです。同様の遺跡は新潟県内の各所にあつて、古津八幡山遺跡に限ったことではありません。先ほど、新潟県で早い段階に住居が見つかった例として、斐太遺跡群という遺跡名を挙げました。新井市の高田平野西縁の丘陵上に、古津八幡山遺跡と同じように大規模なムラが築かれ、古津八幡山遺跡と同じように、ムラの周りに濠をめぐらしています。この2遺跡以外でも、上越市の裏山遺跡、三条市の経塚山遺跡など平野部を望む各地の丘陵上に高地性集落がつくられ、その最北端が村上市の山元遺跡です。山元遺跡に立つと阿賀北の新潟平野を一望できます。丘陵上であればどこでもよいわけではなく、とても眺望に優れている点も共通しています。

では、なぜ高地性集落をつくるのか。それにはやはり相応の理由があるはずです。まず考えられるの

は社会的緊張です。ムラどうしの争いからムラを守るという理由が考えられます。弥生時代後期でも後半に北陸で高地性集落が目立つので、これは中国の『後漢書』とか『魏志倭人伝』とかという中国の史書に、後漢の終わりごろ、紀元後2世紀後半に「倭国、大いに乱れる」とか「倭国乱れる」という記事が出てきます。それを彷彿とさせる状況と言えるでしょう。低地にムラを構えてしかるべきなのに、丘陵に山の上にムラを構える。それが3世紀後半から4世紀にかけて、古墳時代になると、ふたたび平場に戻ります。古津八幡山遺跡は200年余りの長い期間丘陵上にムラがありますが、他は100年にも満たない期間のようです。私は、こうしたムラどうしの争いが意識された社会的緊張こそが高地性集落が出現する最たる理由だと考えます。でも、それにしても争いに用いる武器類が出てこないではないし、濠の外側に土塁を設けるのではムラの中を守る防御施設たりえないから、防御が最たる理由だとは考えられないという意見もあります。そうした主張には、私は次のように応えます。中世の山城や城館でどれだけ武器が出てくるのか。武器などまず出てこないにもかかわらず、それらを誰もが争いに備えた施設だと考えている。なぜか。それは文字記録にムラどうしの争いや記されているからだ。また、社会的緊張があつたからといって、ただちに集団間の組織的争いがあつたとは限らない。それに備えることこそが重要と意識されたと考えられないだろうか、と。ここにムラがあるということを周囲に示すための施設だとか、ムラびとが集まって共同で環濠を掘削することによってムラびとの結束を図るのだという意見もあります。でも、それでは弥生時代後期、多くの場合は後期後半という一時期に限って高地性集落が造営されることの説明ができません。

北陸などいろんな地域の人びとと交流しているのだから社会的緊張などなかったのではないかという疑問もあるかもしれません。しかし、各地の情報を知らぬゆえにムラの防御を確かなものにするということもあるでしょう。それから北陸では後期後半に高地性集落が増えると言いましたが、この時期は丘陵上の遺跡以上に平野部の遺跡＝ムラが急増し、大規模化したことが分かっています。いわゆる人口圧の高まりが社会的緊張をもたらしたことも考えられます。

後期後半に現れた交流の変化

古津八幡山のムラの後半の時期に話を進めましょう。古津八幡山遺跡でもこの時期の資料が豊富に出

土しています。この遺跡で発見される後期後半の土器を見てみますと、東北的であり在来的でもある天王山式の流れをくむ後継者の縄文を施した土器群と、北陸に由来する無文の土器が明瞭となります。後期前半の天王山式土器の段階では、ほぼそれのみでしたが、北陸系土器が急増しているのです。さらに両者の特徴を兼ね備える土器がつくられるようになります(スライド35)。いわゆる折衷現象が起きています。

この遺跡だけではなく、新潟県域全体を見ても、弥生時代後期後半になりますと、北陸、加賀・能登、富山県方面に由来する土器だけでなく、住居形態や墓も北陸系となります。こうした北陸系に由来する文化要素が著しく顕著になります(スライド36)。圧倒的多数派になると言ってもいいでしょう。古津八幡山遺跡が、そうした北陸に由来する文化世界の拠点になったと言ってもいいでしょう。

北陸に由来する文化要素は、新潟県内にとどまらずさらに東方の地域でも濃厚に見られるようになります。例えば会津盆地のど真ん中に、湯川村桜町遺跡という集落遺跡があります。後期後半に突如出現した集落ですが、天王山式土器の流れをくむものがある(スライド37)一方で、北陸に由来する土器も明瞭になっています。それどころか、それまでは福島方面では、ムラは一時期の住居数軒にとどまるごく小規模なのが基本だったのですが、この時期から住居十数軒の大形のムラを構えるようになります。住居の構造も、それまでの竪穴住居、つまり当時の地表を掘り窪めて住居の床を設営するものから、地表面に床を設ける平地式住居が主流となります。住居の周囲に溝を巡らして、雨水や湿気が住居内に入らない工夫も始まります。それからお墓も、四角く溝を巡らして墓地を区画する方形周溝墓という墓の形式が突如登場します。北陸に由来する土器、住居、墓、それからムラの規模、こういうものが激変するのです。後期後半の北陸に由来する新たな文化の東方波及は、新潟平野にとどまらず、会津盆地にまで波及します。後期前半には、下越から北陸へと人々が往来していたのですが、後期後半になると人と文化の往来の流れは180度逆転したことになります。

北陸からの文化的影響だけではなく、さらに西方の地域との往来や物資の流入がみられます。いくつか拾い上げてみましょう。柏崎市の開運橋という所で、かつて工事中に採集された1個の壺があります(スライド38中央)。これは1987年に刊行された『柏

崎市史資料集I』に収録されていたのですが、その図面をみて私は本当に驚きましたね。これは北部九州の壺なんですよ。当時、北部九州の弥生後期の土器は、北陸はおろか、山陰でも発見されていませんでした。直線距離にして約800kmも遠方の九州の土器が新潟で出ていたんです。最近では山陰地方で北部九州の弥生後期の土器や、さらに朝鮮半島からの土器もみつっていますが、北陸ではいまだに類例がありません。ただ、これは工事中の発見ですので、気を付けなくちゃいけないのは現代の持ち込み品が紛れ込んだ可能性はないかということです。時々こういうことがあるんですね。ところがこの土器は、柏崎で戦前から厳格な先生について考古学を勉強された方が採集されていますので、これは問題ありません。

次に、スライド38の右側は、上越市の裏山遺跡という高地性集落で見つかった、田んぼを耕したり、土を掘削するのに使う鋤(スコップ)に付ける鉄の刃先です。これは、九州に一番例が多い。最近、山陰でもだいたい出てきましたし、北陸でも何例か出てきましたか。遠く九州方面にまで由来をたどることができる。

スライド39は旧寺泊町の屋舗塚という遺跡です。小高い丘陵の上に1つだけ方形周溝墓が見つかりました。方形に溝を掘削して囲った墓の中央に非常に深い墓穴を掘り、しかも一番底に棺を置く部分を、さらに深く掘る。そしてこの中に、これ壊れちゃってますけども、壺を置く。これも北近畿に特徴的な深さ1mもある墓穴を掘り、その中央に木棺をしつらえています。方形周溝墓の周溝の四隅が途切れるのは北陸の特徴ですが、遺骸を埋葬する中央の墓穴はとでも深く、小壺を死者に添えています。これは北近畿の丹後半島あたりに類例のある埋葬法です。しかも周溝から出てきた土器をみると、北陸系のものが主ですが、丹後あたりと思える土器もあります。

さらに、朝鮮半島に由来する鉄斧が県内で確認されています。三条市の険しい丘陵上にある高地性集落の経塚山遺跡では板状鉄斧、旧和島村の姥ヶ入南遺跡の方形周溝墓では副葬品として袋状鉄斧が発見されています(スライド40)。この2点とも朝鮮半島から、リレー式にでしようけれど、もたらされたものです。東アジアと新潟界隈の人が間接的にであれつながりを持っているとわかります。長野県内の千曲川流域のいくつもの遺跡で朝鮮半島系の青銅器や鉄器が発見されていますが、これらも上越から峠を

越えて長野側に運ばれたものです。

南北の交流

古津八幡山遺跡や下越では大陸から持ち込まれたことが明らかな実例はありませんが、一連の習俗や物流ネットワークの中にあることが分かります。スライド41は古津八幡山遺跡と村上市山元遺跡の墓から見つかった副葬品です。古津八幡山遺跡では方形周溝墓が検出されており、木棺内から鉄剣が副葬されていました。姥ヶ入南遺跡でも鉄斧とともに鉄剣が副葬されています。墓に鉄製武器、特に鉄剣を副葬する習俗は、朝鮮半島に由来するものです。北部九州、山陰、北陸と、リレー式で伝わって、長岡や新潟・村上まで波及してきたんです。ところが、古津八幡山遺跡では、面白いことに打製石鏃が副葬されていました。同じ武器でもこれは大陸系ではなく、打製石鏃を死者に添える習俗は北海道から東北にかけてみられる習俗です。西方と北方に由来する葬式にまつわる習俗が共存しているのです。とても面白いことだと思います。

村上の山元遺跡では（スライド43～45）、筒形銅製品や、鉄製短剣、ガラス玉が副葬されていました。ガラス玉の原料は大陸です。つくってるのはどこかわかりませんが、おそらく西日本のどこかでしょう。九州でも弥生時代後期になると大量に副葬されるようになるものです。鉄製短剣は、刃がとても薄いつくりでしたが、鉄剣であることに違いはありません。筒形銅製品は近畿周辺か西日本ですね。こうした西日本の弥生後期社会で流通した物品が村上界限の人びとの手にわたり、死後、墓に副葬されます。ところが、これらの副葬品を納めた墓が東北地方在来の形式なんです。ガラス玉72点を副葬した墓は土坑墓です。土壙墓の底面は丸みをもっていますので、板を棺形に組む形式の木棺ではなく、樹皮で棺形をつくるか、場合によっては遺骸を布などで包んで埋葬する方式でした。鉄剣が見つかったのは土器棺でした。これは乳幼児用の遺骸を壺の中に納めるものです（スライド45）。古津八幡山でみたように打製石鏃を入れるのも東北から北海道に見られる習俗です。ですから、山元遺跡の墓には、東北ないし北方系の要素と西日本の要素が共存しているんです。これが下越の特徴だろうと思います。

山元遺跡の居住域からは、なんと続縄文土器が出ています（スライド46）。江別（後北C1）式土器という型式で、現在までのところ最も近い出土地は津軽の海岸部です。きっと男鹿半島あたりでも遺跡を

形成しているのではないかと想定できますが、まだ見つかっていません。そうした北方から、続縄文土器と呼ばれる北海道に住まう人々が使う土器が新潟県の沿岸部に点々と出てくるわけです。しかも、旧中条町の兵衛遺跡、それから旧豊栄市の椋遺跡、旧巻町の南赤坂遺跡では、特にまとまって出てきますので、おそらくしばらくここに滞在しているはずで、北方系の人たちが。北海道からかどうかわかりません。少なくとも津軽辺りから舟で海岸沿いを南下して新潟の海岸部でキャンプしているのでしょう。

こういった北あるいは西のものが錯綜して出てくるというのは、当然ながら、新潟県だけのことではありません。南隣の長野県に行きますと、こんなものが出てきます（スライド47）。長さ74cmの鉄剣です。X線観察しますと、これ、握りのところにこういう渦巻飾りがあります。これは朝鮮半島東南部に特徴的なものですので、朝鮮半島製品の可能性が高いとみています。特注品だという意見もあります。特注品だったらすごいですね。朝鮮半島に特注であるならば、長野県北部の弥生人と朝鮮半島の鉄器製作工人とが直接交渉していることになりそうですからね。スライドの鉄矛は長野県上田市の上田原遺跡で出土したもので、これも朝鮮半島製品です（スライド48）。この鉄斧も、それからこの青銅のバックルも朝鮮半島製品です。私は、これら朝鮮半島製の文物は、長野の人たちが単独で手に入れたわけではないと思っています（スライド49）。長野の人は上越の人々と交流でつながっている。上越の人は富山や能登の人びとと共同する。そういう日本海側各地が連携した物流のルート・ネットワークがあるのだと考えます。日本海というのは、地球規模でみた場合は大きな湖のようなもので、「内海」といっても過言ではありません。対馬海流が朝鮮海峡から津軽海峡方面に流れ、沿岸部にはその逆流が流れていますので、舟で往来するにはとても有効な海路と言えます。新潟界限もそういう物流ネットワークの中に組み込まれていたのです。

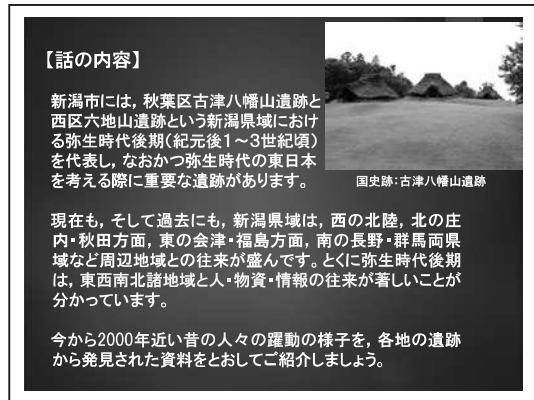
この時期ですと、日本海側を西から東に向かう人々は準構造船を用いたことが分かっています。丸木舟を前後に組み合わせ、その上に板を組み合わせで大形化した構造の舟です（スライド50）。一方、北方から南へ向かう人々は、縄文時代由来の丸木舟による移動だと思います。こういう異なる構造の舟が新潟の、私たちの眼前を行き交っている。そんな情

景を私は脳裏に描いています。

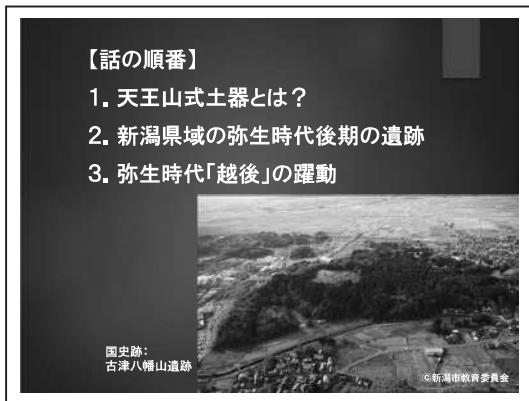
最後に、古津八幡山遺跡の時代は、『後漢書』や『魏志倭人伝』（三国志魏書東夷伝倭人条）に重要な記事が出てくる時期にあたります。北部九州の弥生時代後期の有力者の墓地から後漢王朝の中樞から入手した銅鏡や鉄刀が多数発見されます。それは『後漢書』に建武中元二（西暦57）年に、倭の奴国の最有力者が光武帝に遣使して「漢委奴國王」金印を下賜されています。その50年後にも、安帝永初元（西暦107）年には倭国王師升等が遣使し、景初三（西暦239）年には倭国の女王卑弥呼が魏に使いを出しています。この古津八幡山遺跡の時代が、日本列島で生きた人々が東アジアの強大な政権と本格的な交渉を開始した時代です。古津八幡山遺跡を訪れると、天気が良ければ必ず佐渡島が見えるかを確認めます。それとともに私は心の中で、はるか西方を見やり、800～900km程のかなたではすでにそんな動きがあったことも思い浮かべています。



スライド1



スライド2



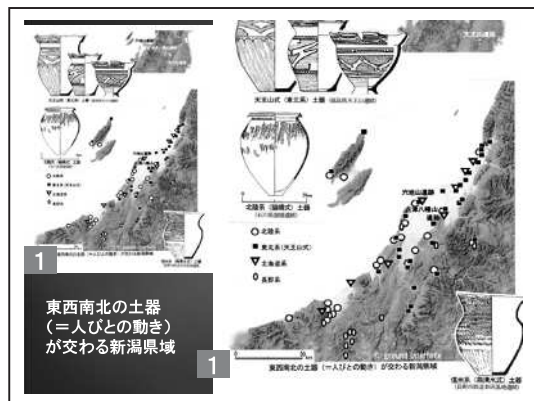
スライド3



スライド4



スライド5



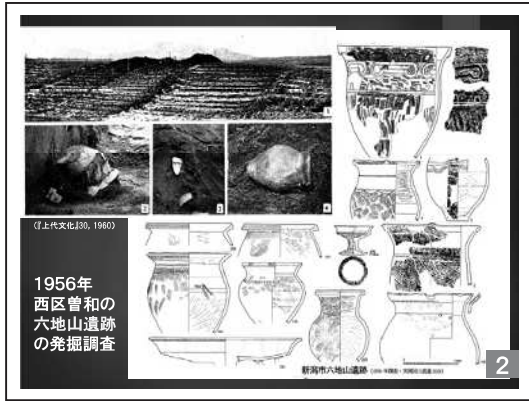
スライド6



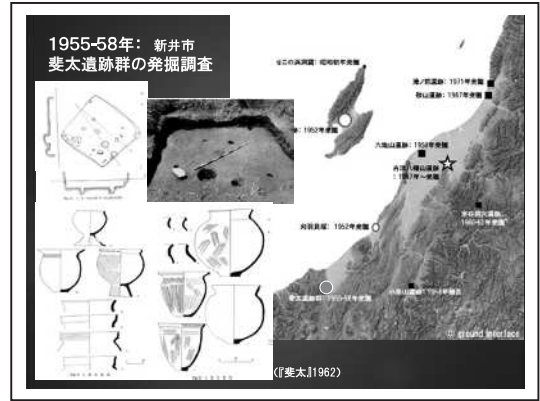
スライド7



スライド8



スライド9



スライド10



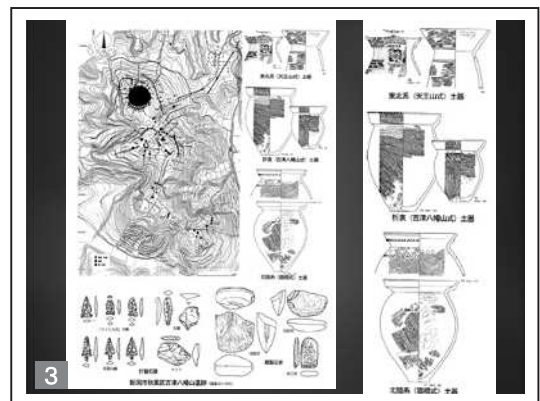
スライド11



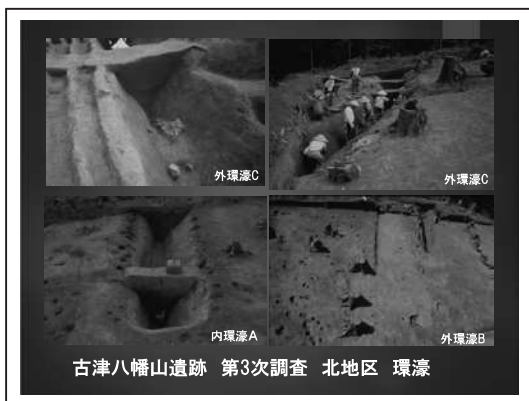
スライド12



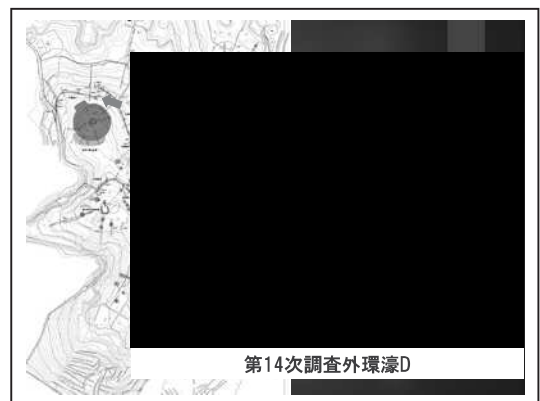
スライド13



スライド14



スライド15



スライド16



スライド17

2005(平成15)年に、国史跡に指定
【指定理由文書】 (抜粋)

1987年からの調査によって、日本海沿岸として最北に位置する弥生時代後期の大規模な高地性の環濠集落や、新潟県最大規模の古津八幡山古墳をはじめとして、弥生時代から古代にかけての複合遺跡であることが判明した。

弥生時代後期後半の大規模な高地性環濠集落であり、新潟平野における弥生時代後期の集落の様相や他地域との交流の実態を示す。

また、この時期、高地性集落が日本海沿岸にも点々と認められるようになり、本遺跡は現在のところ最北に位置し、西日本を中心とした社会の変化の影響が、この地域にも及んでいたことを示している。

このことは、集落の廃絶後、同じ場所に前方後方形周溝墓を経て大型古墳が造営されたこと、この地域が日本海沿岸における古墳分布の北限であることと関連して興味深い。

このような本遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての北陸地方の社会情勢やその変遷を考えるうえで、きわめて重要である。

よって史跡に指定し、保護を図らうとするものである。

スライド18

3. 弥生時代「越後」の躍動

弥生時代後期の越後は、東西南北の諸地域と、密な上流を重ねた。

それは、直接には前段階(中期後半: BC1世紀後半)の動きがもとになっている。

スライド19

新潟県内で 東西南北の4系統の土器が行き交う

スライド20

ひとつの遺跡の中で 東西南北の4系統の土器が共存する!

西から 北から

東から 南から

新発田市山草荷遺跡の土器群構成 (参考: 東西南北交流の現場)

スライド21

3. 弥生時代「越後」の躍動

弥生時代後期の越後は、東西南北の諸地域と、密な上流を重ねた。

それは、直接には前段階(中期後半: BC1世紀後半)の動きがもとになっている。

スライド22

後期前半

天王山式土器 古津八幡山遺跡

スライド23

天王山式土器

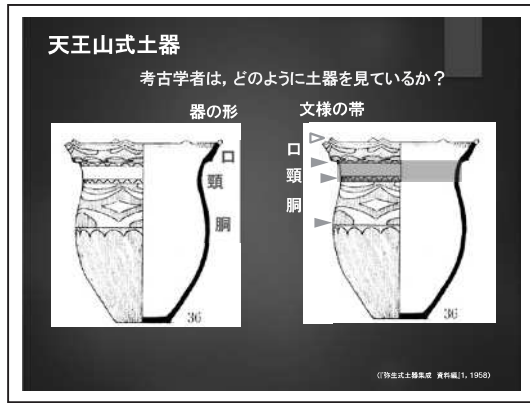
考古学者は、どのように土器を見ているか?

器の形

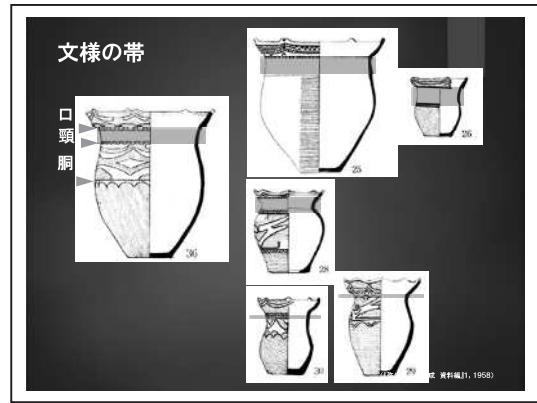
36

(弥生式土器群構成 資料編1, 1958)

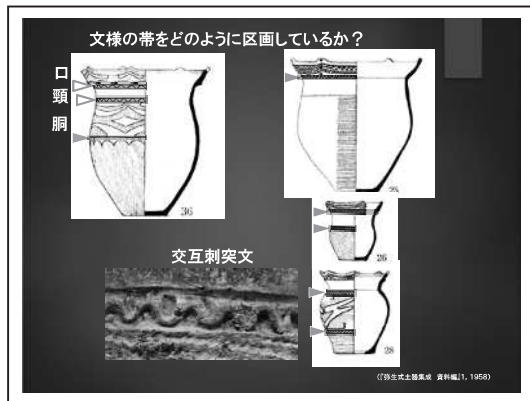
スライド24



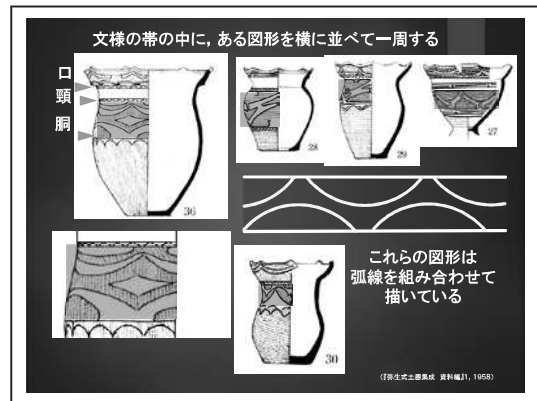
スライド25



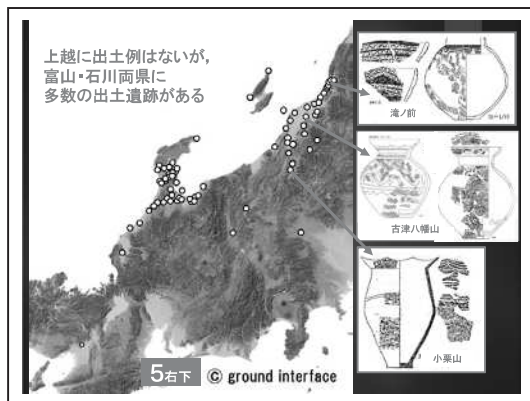
スライド26



スライド27



スライド28



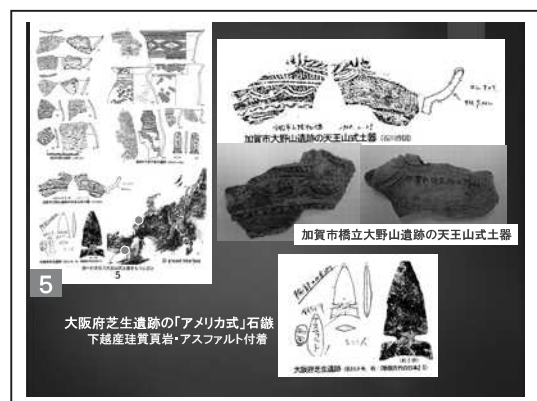
スライド29



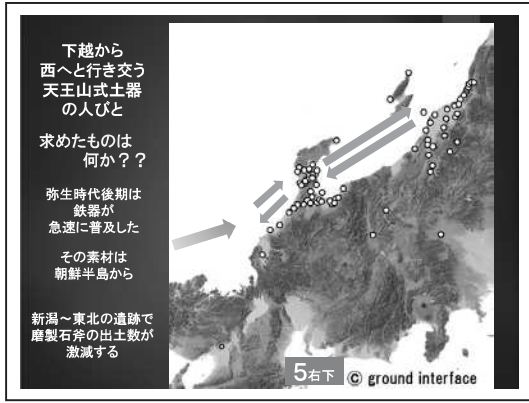
スライド30



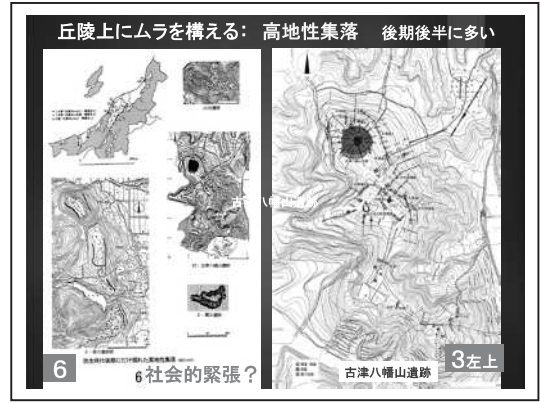
スライド31



スライド32



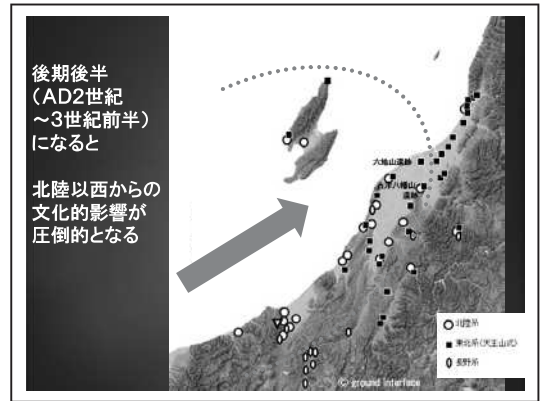
スライド33



スライド34



スライド35



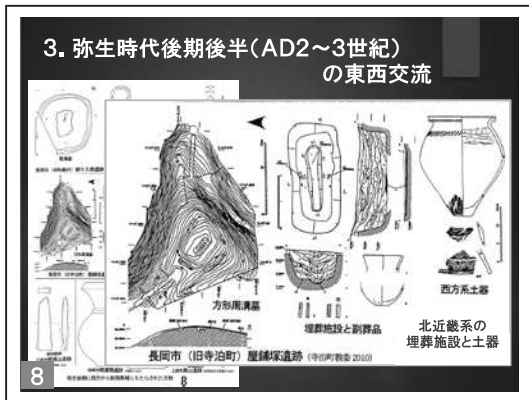
スライド36



スライド37



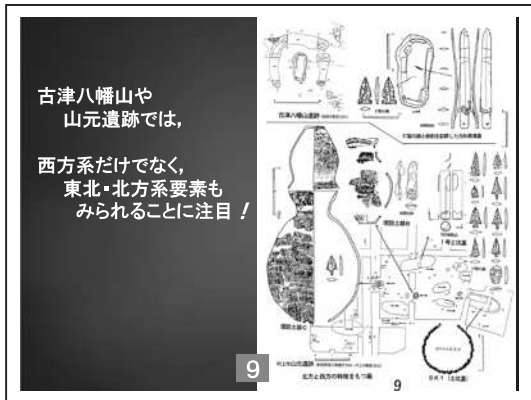
スライド38



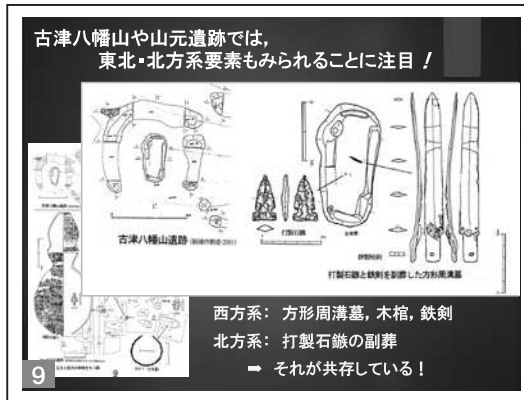
スライド39



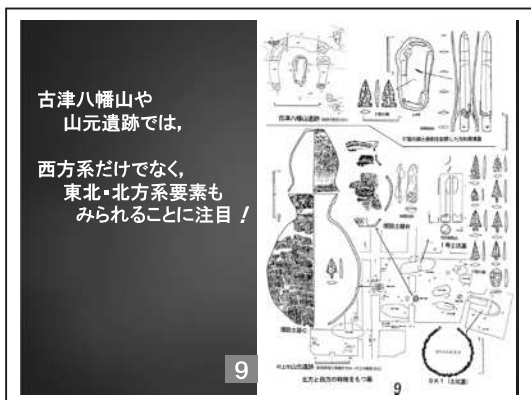
スライド40



スライド41



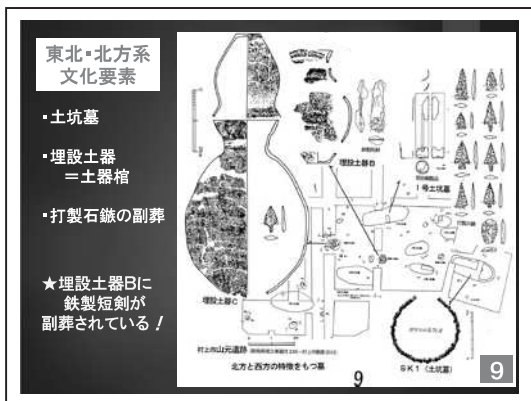
スライド42



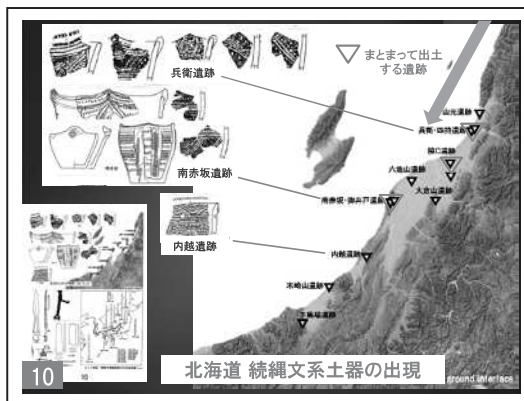
スライド43



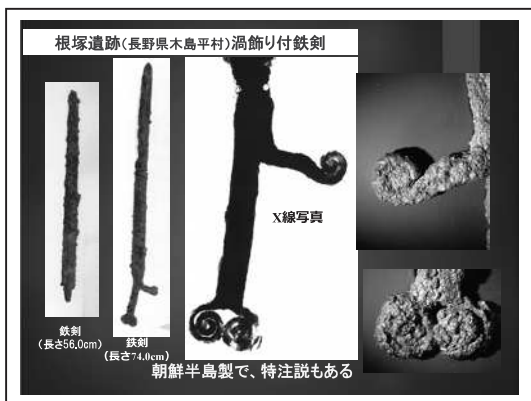
スライド44



スライド45



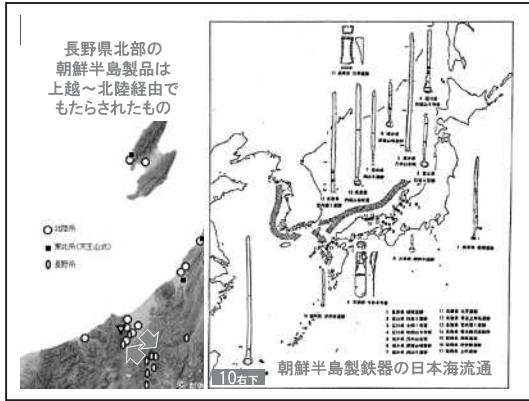
スライド46



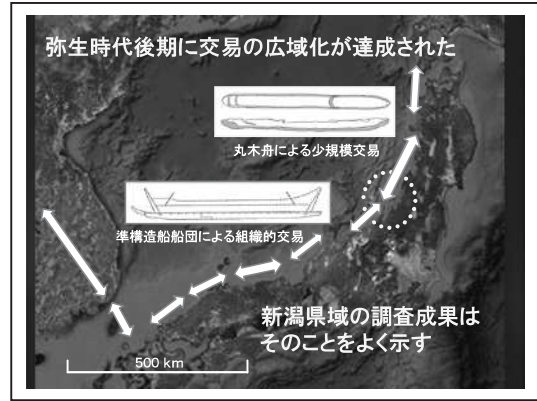
スライド47



スライド48



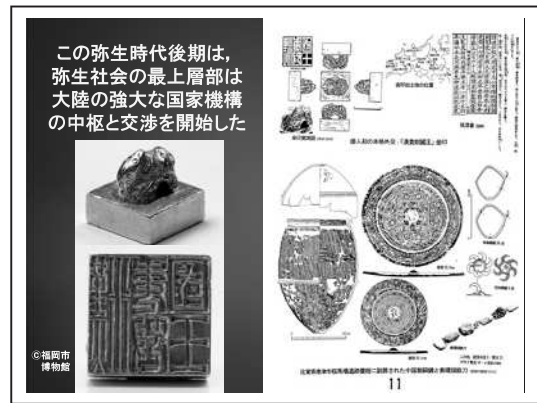
スライド49



スライド50



スライド51



スライド52



スライド53

写真・図出展一覧 ※以下の出典から引用し、加筆・編集を施した。

- スライド1・3・12・13：写真・新潟市教育委員会提供
スライド2・27・30・37・44・47・48・53：写真・石川撮影
スライド4・6・7・8・10・19・22・29・35・36・46・49：地図・Ground Interface
スライド4・24～28：図・坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成1』弥生式土器集成刊行会
スライド5：図・坪井清足1958（前掲）、写真・杉原莊介1964『日本原始美術3 弥生式土器』講談社
スライド6・19・22：図・坪井1958（前掲）、橋本澄夫1966「北陸」『日本の考古学Ⅲ』河出書房新社、
笹沢浩1976「第一編考古学編 第三章弥生式時代」『上水内郡誌・歴史編』
スライド7：図・渡邊朋和2020「新潟市西区六地山遺跡出土弥生土器の再検討」『新潟市文化財センター年報』第7号、中川成夫1954「南魚沼郡六日町小栗山出土の土器」『越佐研究』第7集、写真・斎藤秀平1937『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯 新潟県
スライド8：図・渡邊2020・中川1954（前掲）、写真・新潟県教育委員会1953『千種』
スライド9：図・渡邊2020（前掲）、写真・寺村光晴「越後六地山遺跡」『上代文化』第30輯
スライド10：図・写真・駒井和愛・吉田章一郎1962『斐太』慶友社
スライド11：図・岩波書店2011『図書』第747号、関雅之1972『滝ノ前遺跡』村上市教育委員会、伊東信雄1955「東北」『日本考古学講座』3、石丸和正ほか2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相」『三面川流域の考古学』第2号、写真・杉原1964（前掲）
スライド13～15・17・23・35：図・写真・新津市教育委員会2001『古津八幡山遺跡発掘調査報告書』
スライド16：写真・新津市教育委員会2004『八幡山遺跡群発掘調査報告書—第11・12・13・14次調査—』
スライド20・21：図・新発田市教育委員会2018『山草荷遺跡出土の弥生土器』及び石川作図
スライド29：図・石丸ほか2003、新津市2001、中川1954（いずれも前掲）
スライド30：図・上野章1974「高岡市頭川遺跡」『大境』第5号、富山県文化振興財団2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』、角川書店1992『新版古代の日本5 近畿I』
スライド31：（公財）富山県文化振興財団2006（前掲）
スライド32：図・上野1974、（公財）富山県文化振興財団2006、角川書店1992（前掲）、および石川写真・拓本・メモ
スライド34：図・新潟県教育委員会2009『山元遺跡』
スライド37：図・福島県教育委員会2005・2011『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告』5・10・11
スライド38～40：図・新潟県教育委員会2010『立野大谷製鉄遺跡・姥ヶ入製鉄遺跡・姥ヶ入南遺跡』、新潟県教育委員会・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2000『裏山遺跡』、寺泊町教育委員会2010『屋鋪塚遺跡』、三条市教育委員会『内野手遺跡・経塚山遺跡』、柏崎市史編さん室1987『柏崎市史資料集考古篇1』柏崎市
スライド41～45：新潟県教育委員会2009（前掲）、村上市教育委員会2013『山元遺跡』
スライド46～49：前山精明1999「続縄文」『新潟県の考古学』新潟県考古学会、石川日出志2014「弥生時代後期・佐久市北一本柳遺跡出土鉄斧の歴史的意義」『佐久考古通信』113、林大智2002「石川県における鉄器の流通と社会の変革」『鉄器の導入と社会の変化』（公財）石川県埋蔵文化財センター、木島平村教育委員会2002『根塚遺跡』
スライド50：大阪文化財センター1987『久宝寺南（その2）』、千葉県史編纂委員会2000『千葉県の歴史資料篇・考古1（旧石器・縄文時代）』
スライド51・52：唐津市教育委員会2014『末盧国遺跡群総括報告書』、本田浩二郎2016「国宝金印「漢委奴國王」の鈕孔に関する視点」『福岡市博物館研究紀要』第25号、石原道博1985『新訂魏志倭人伝』岩波文庫